

40431

教科書文庫

4
110
31-1930
25000 27861

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

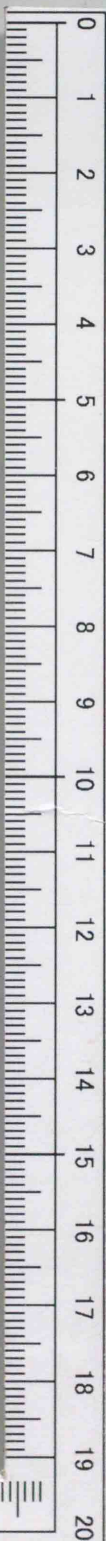
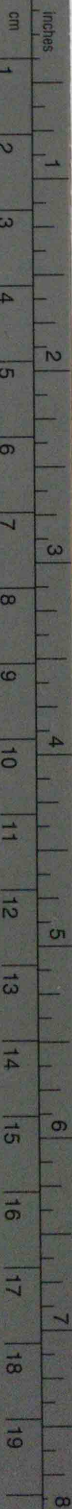


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫

4

110

31-1930

2500027861

尋常小學修身書 卷五

兒童用

文部省





教科書文庫

4

110

31-1930

2500027861



尋常小學修身書 卷五

兒童用

文部省

登録番号	
27861	
分	375.93
類	M

広島大学図書

2500027861





目 録

第一課	我が國……………	一	第十五課	勇氣……………	四十
第二課	皇太后陛下……………	三	第十六課	忍耐……………	四十三
第三課	忠義……………	五	第十七課	自信……………	四十八
第四課	舉國一致……………	九	第十八課	主婦の務……………	五十
第五課	公民の務……………	十二	第十九課	朋友……………	五十三
第六課	公益……………	十四	第二十課	禮儀……………	五十五
第七課	衛生……………	十八	第二十一課	度量……………	五十七
第八課	儉約……………	二十一	第二十二課	信義……………	六十一
第九課	産業を興せ……………	二十三	第二十三課	誠實……………	六十三
第十課	孝行……………	二十六	第二十四課	謝恩……………	六十六
第十一課	兄弟……………	二十八	第二十五課	博愛……………	六十八
第十二課	進取の氣象……………	三十一	第二十六課	德行……………	七十一
第十三課	勤勞……………	三十四	第二十七課	よい日本人……………	七十四
第十四課	勉學……………	三十七			

教育ニ關スル勅語



朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹  
ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心  
ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精  
華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝  
ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ  
博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ  
德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ  
重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天  
壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良

ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰ス  
ルニ足ラン  
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ  
俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外  
ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德  
ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名 御璽



尋常小學修身書卷五

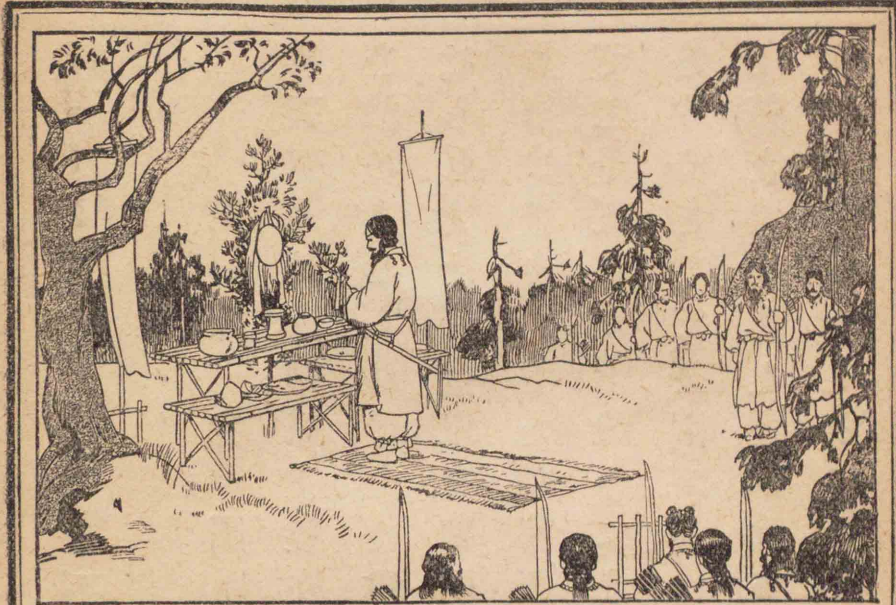
兒童用

尋修五

第一課 我が國

昔天照大神は御孫瓊杵尊をお降しになつて、此の國を治めさせられました。尊の御曾孫が神武天皇であらせられます。天皇以來御子孫がひきつゞいて皇位におつきになりました。神武天皇の御即位の年から今日まで二千五百九十餘年になります。此の間、我が國は皇室を中心として、全國が一つの大きな家族のやうになつて榮えて來ました。御代々の天皇は我等臣民を子のやうにおいづくしみになり、我等臣民は祖先以來、天皇を





親のやうにしたひ奉つて、忠  
君愛國の道に盡しました。世  
界に國は多うございませすが、  
我が大日本帝國のやうに、萬  
世一系の天皇をいたゞき、皇  
室と國民が一體になつてゐ  
る國は外にはございません。  
我等はかやうなありがたい  
國に生まれ、かやうな尊い皇  
室をいたゞいてゐて、又かや  
うな美風をのこした臣民の

尊修五

尊修五

子孫でございますから、あつばれよい日本人となつて  
我が帝國のために盡さなければなりません。正

第二課 皇太后陛下

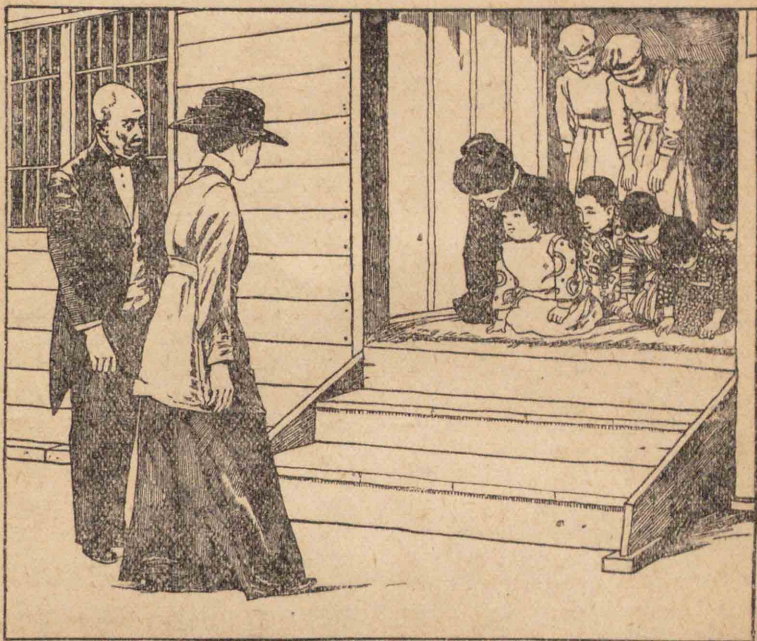
皇太后陛下は御幼少の頃から御しつそにあらせられ、  
御服装などもぜいたくなものは決してお用ひになら  
ず、學校にはたいてい御徒歩でお通ひになりました。又  
大そうおいつくしみ深くあらせられ、人々をおあはれ  
みになりました。

皇后におなりあそばしてからは、我が國の産業に御心  
をお用ひになり、宮中で御みづから蠶をおかひになり、  
博覽會や共進會などにも、たびく行啓になりました。

後多  
御心  
自然

本多  
ありか





大正十二年九月關東地方に大地震があつた時、陛下は

又諸種の學校に行啓になつて、教育が進歩するやうにおはげましになりました。陛下は博愛慈善の事業に深く御心をお用ひになり、日本赤十字社總會には毎回行啓あらせられて、赤十字社事業が發達するやうにおのぞみになりました。

尋修五

日光の御用邸に御滯在中でございましたが、罹災者の身の上を大そう御心配あそばされ、間もなく東京に還啓あらせられ、三日にわたつて、市内の病院や救護所などを御見舞になつて、罹災者をあつくお慰めになりました。

御歌

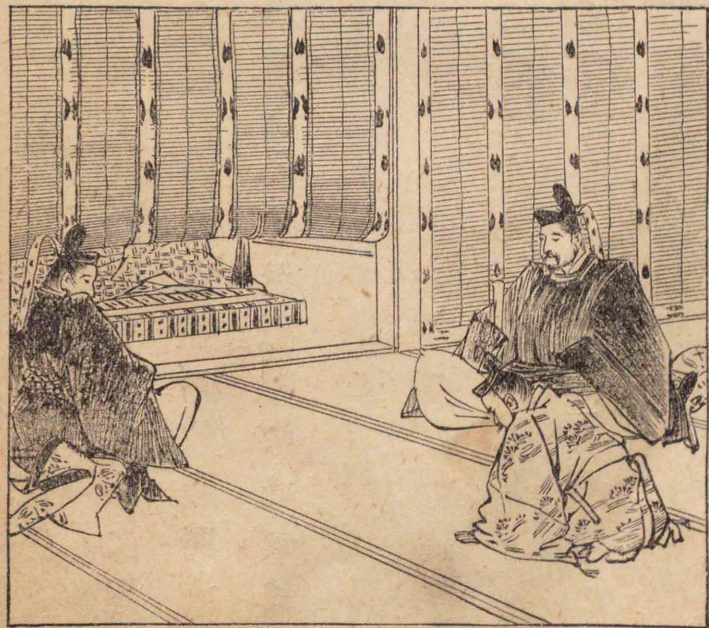
おほとのをたゞく霰の音にしも  
かりやのよるの寒さをぞおもふ

第三課 忠義

後醍醐天皇の御代に、鎌倉の北條高時が天皇の仰に従ひませんで、天皇は高時を討たうとなさいました。高



時は早くもそれを知つて、大軍を京都にのぼらせました。そこで天皇は山城の笠置山に行幸になりましたが、地方の豪族も賊軍の勢に恐れてお味方申し上げる者がありませんので、大それた御心配になりました。楠木正成は河内の金剛山の麓に住んでゐましたが、天皇の御召をうけ、此の上もない武士の名譽と、勇んで笠置の行在所へまゐり



尋修五

ました。天皇は大そう御喜びになり、高時を討つて天下を太平にせよ」と仰せつけられました。正成は詔をありがたくお受けして、賊軍が強くても、謀を用ひて討てば勝てないことはございませぬ。しかし勝負は戦の習でございませぬから、たまに負けるやうなことがあります。でも、御心配には及びませぬ、正成さへ生きて居りましたら、御運はきつと開けるものと思し召せ」とたのもしく申し上げて御前をさがりました。正成は河内へ歸つて赤坂城をきづき、僅か五百ばかりの兵で、まつ先に勤王の旗をあげました。さうして天皇をお迎へ申し上げようとしてゐるうちに、賊軍は笠置



を攻落し、更に赤坂城におしよせて來ました。正成は度  
度それを打破つたが、兵糧が付きたので、城を焼いて、身  
をかくしました。間もなく、金剛山に千早城をかまへて、  
千人足らずの兵で立てこもり、おしよせて來た賊の大  
軍をさんぐに苦しめました。その間に正成の旗あげ  
を聞いて、お味方申し上げる者が次第に多くなつて、高  
時はとう／＼打滅されました。

天皇が隱岐から京都へおかへりになる時、正成は兵を  
引きつれて兵庫までお出迎へ申し上げました。天皇は  
正成を御側近くお召しになつて、その忠義をおほめに  
なりました。正成は、強敵を破ることが出來ましたのは、

尋修五

全く陛下の御徳によることと存じます。とお答へ申し  
ました。それから天皇は正成に前驅をさせて、めでたく  
京都へおかへりになりました。下

第四課 舉國一致

明治三十七八年戦役は、我が大日本帝國が國家の安全  
と東洋の平和のためにロシアと戦つて、國威を世界に  
かゝやかした大戦争であります。明治三十七年二月十  
日に宣戰の詔が下ると、國民は皆一すぢに大御心を奉  
體して、國の爲に盡さうとかたく決心しました。  
出征軍人の元氣は盛なもので、忠勇の美談はあげつく  
されない程ありました。病をおし、傷をかくして召集に



自來の自由  
之に以ては  
下い。

應じた在郷軍人もあり、三人の兄が皆戦死して残つた末の弟が志願兵になつた家もありました。戦地では雨霰と飛來る彈丸の中で、落ちつきはらつて自分の務を盡す者もあれば、敵彈のために負傷しても、内地へ送りかへされることを拒んで、ぜひ今一度戦線に立たせて下さい。と願ふ者もありました。

戦場に出ない國民も皆一致して、忠君愛國の誠を盡しました。働さざかりの壯丁が出征した後は、老人も婦人も少年も皆大決心で、家業につとめ、儉約を守つたので、全國の貯金の高は却つて戦前よりも増しました。戦費のために租税は平時よりも大そう多くなつたが、國民

尋修五

其の権利  
を  
ん

は喜んで負擔して納税を怠る者などはありませんでした。軍人が出征する時には、各地の人々はまごころをこめて送り迎へをしました。戦地へは慰問袋や手紙を送り、軍人の家族遺族にはいろく、と行届いた世話をしました。出征者の妻は心を引きしめて、家事をど、のへ、子供を育てて、戦地の夫に心配をかけないやうにしました。又身分の高い婦人は自分で繻帶を造つて、負傷者に送り、或は進んで篤志看護婦となつて、親切に傷病者の世話をしました。

明治天皇御製

國を思ふ道に二つはなかりけり



軍のには立つも立たぬも

第五課 公民の務

郷里を愛するのは人の情であります。我等が朝夕見なれてゐる山や川は、どこへ行つても忘れることが出来ません。我等は他日市町村の公民となつて、我が愛する郷里を一そう楽しいよい所にしませう。

どの市町村も市役所又は町村役場を置き、學校を建て、道路を造り、橋を架けなどして、そこに住む人々の便益をはかつてゐます。

かやうに公共の便益をはかるためには、たくさん費用が入ります。其の費用は市町村民が分擔するのが當

尋修五

然です。市町村税を納めるのはその爲です。税は進んで納むべきものであつても、し納税の期限におくれると市町村の仕事の妨になります。

市町村の規則を作つたり、豫算をきめたり、教育・勸業・土木・衛生等の仕事をしたりするについて、いろく評議

するため、市町村民は自分等の中から、市町村會議員を選挙します。市町村會議員はかやうに公共の事をきめる大切な役でありますから、これを選挙する人はよく考へて、よい人を選び、又選ばれて議員となつた人は、熱心に公共の幸福を増すことにつとめなければなりません。



又市町村の代表者となつて公共の事務をとり行ふ者は市町村長です。市長は市會で、町村長は町村會で選舉します。選ばれて此の地位につく人は、それを名譽と思つて、忠實に市町村のために盡す心掛が大切であります。

我等は將來、公民となり、我が市町村のことは我がことと心得て、納税、選舉の務をはたし、進んで産業を盛にし、風俗をよくするなど、協同一致して公共のために盡し、我が郷里をりつばな市町村にしませう。

第六課 公益

古橋源六郎は三河の稻橋村の人で、家は代々酒造を業

としてゐました。我が國に始めて市制町村制が實施された時、村長に選舉されました。後に稻橋村が武節村と組合になつてからも組合長に選舉され、死ぬまで引きつゝいて、この職をつとめ、公益のために力を盡しました。

源六郎は三河の土地が馬





を飼ふに適してゐることを知つて、奥羽産や外國産の  
良い馬を數十頭飼ひ、馬の改良をはかりました。ところが、改良馬は大きいばかりで、女や子供が使ふにも困る  
し、其の上のろくて役に立たない。と悪口を言ひふら  
す者がありました。しかし源六郎は馬の市場を開きな  
どして、改良馬が大きくて力も強い上におとなしくて、  
使ひやすいことを世間に知らせたので、悪口を言ふ者  
がなくなりました。其の後、組合をつくつてだん／＼事  
業をひろげて行くうちに、一時に馬のねだんが下つて  
大損をしました。源六郎は長い間、晝夜苦心してその回  
復をはかつたので、とう／＼損をとりかへすことが出

來ました。三河に良い馬をたくさん産するやうになつ  
たのは源六郎の力であります。

源六郎は又父の志をついで、此の地方の人々に養蠶を  
勧めて、繭の産額が村の内だけでも、年々八九萬圓以上  
になるまでにしました。又自分で多くの費用を出して、  
山に木を植ゑさせました。それが今ではりつばな森林  
になつてゐます。源六郎は農事の改良をはかる爲に、ま  
だよそにないうちに村内に農會を設けて、その發達に  
力を盡しました。農會はそれからだん／＼全國にいき  
わたりました。

源六郎は又村に勤儉貯蓄の風を興さうとつとめまし



た。或時、村の人々と申し合はせて毎日一厘づつ積立てる一厘貯金といふことを始めました。それを賛成する者が多く、後には全村で二萬圓以上の貯金となりました。又村に悪い風がはいつて来て、仕事を嫌つて遊ぶ者や借金に苦しむ者が出来ました。源六郎はそれを心配して、村の人々と規約を設け力をあはせて、この悪い風をなほすことに骨折つたので、村の風儀もよくなりました。

○ 第七課 衛生

○ 傳染病の流行するのは多くは人々の衛生に關する注意が足りないところから起るものです。傳染病につい

尋修五

尋修五

ては、國家も取締をしてゐるけれども、人々が公衆のためを思つて、自分々々で氣をつけなければ、とても十分に其の流行を防ぐことは出来ません。

傳染病にはコレラ・チフスなどのやうに急性のものであり、結核・トラホームなどのやうに慢性のものもあります。傳染病の外に寄生虫病といつて、虫が體內に宿つて起る病氣もあります。いづれも病毒が外から體內にはいつて、病氣を起すものです。例へば、飲食物と一しよにはいつたり、呼吸の時にはいつたり、又不潔なものに觸れた時にはいつたりします。

傳染病にかゝらないやうにするには、常に身體を強壯



にしておくことが第一です。又飲食物に注意し、身體・衣服・住居などを清潔にすることにつとめなければなりません。傳染病の流行する時は、醫師や衛生係の注意を守ることが大切です。萬一、傳染病にかゝつた時は、すぐに醫師の治療を受け、他人にうつさないやうに、十分に氣をつけなければなりません。隠して届出をしなかつたり、迷信から醫師の診察を受けなかつたり、又全快しないうちに人中へ出たりするのは、大そう危険です。衛生に關する注意が足りないところから、傳染病にかかることがあると、それは自分の禍であるばかりでなく、公衆に大そう迷惑をかけます。まして自分の不注意

尋修五

尋修五

から病毒を他人にうつし、大ぜいの人の命をそこなひ、産業を衰へさせるやうになつては、公衆に對して其の罪は決して軽くはありません。

## 第八課 儉約

上杉鷹山は十歳の時に、秋月家から上杉家へ養子に來て、十七歳で米澤藩主となり、よい政治をして評判の高かつた人であります。

鷹山が藩主となつた頃は、上杉家には借財が大そう多く、其の上、領内には不作がついて、人民も難儀をしてゐました。鷹山は此のまゝにしておいてはならないと思ひ、儉約をもととして家を立直し、人民の難儀を救は



うと決心して、まづ江戸に  
 るる藩士に其の志を告げ  
 ました。しかし、藩士の中  
 は鷹山に従はないで、殿様  
 は小藩にお育ちになつた  
 から、大藩のふりあひを御  
 存じない。などと言ふ者が  
 ありました。鷹山は少しも  
 志を動かさず、領内に儉約  
 の命令を出し、まづ自分のくらしむきをずつとつゞめ  
 て、大名でありながら食事は一汁一菜、着物は木綿もの



尋修五

尋修五

ばかりときめて、實行の手本を示しました。

鷹山の側役の者の父が、或日、在方に行つて、知合の人の  
 家に泊つたことがありました。其の人がふるにはいら  
 うとして着物をぬいだ時、粗末な木綿の襦袢だけは、て  
 いねいに屏風にかけて置きました。主人はふしぎに思  
 つてたづねますと、此の襦袢は殿様がお召しになつて  
 るたもので、それを悴がいたゞいて歸つたのを、私かも  
 らつたのです。と答へました。主人はそれを聞いて、大そ  
 う鷹山の儉約に感心し、其の襦袢を家内の人たちにも  
 見せて、いましめました。

第九課 産業を興せ





鷹山は人民の難儀を救ふために、儉約を勧めた上に、なほ産業を興して領内を富まさうとはかりました。荒地を開いて農業をいとなまうとする者には農具料種粃などを與へ、三年の間、租税を免じました。又命令を出して村々に馬を飼はせたり、馬の市場を開かせたりなどして農業を盛

にするたすけとしました。

鷹山は又養蠶を勧めました。領内には、貧しくて桑を植ゑることの出来ない者が多かつたので、自分の衣食の費用の中から年々五十兩づつを出して、桑の苗木を買上げて分けてやり、又は桑を植ゑる者に貸付けてやつて、其の業を勵ましました。

なほ鷹山は奥向で蠶をかはせ、その絲で絹や紬を織らせました。又領内の女子に職業を授けるために、越後から機織の上手な者をやとひ入れて、其の方法を教へさせました。これが世に名高い米澤織のはじめであります。



なせばなるなさねばならぬ何事も

ならぬは人のなさぬなりけり

第十課 孝行

昔山城の川島村に儀兵衛といふ人がありました。生まれは京都でしたが、生まれるとすぐこの村の貧しい家にもらはれて來ました。十歳の時、養父に死別れ、それから三十九年の間、身體の弱い養母に事へて、一心に孝行を盡しました。

家には少しの田地もないので、儀兵衛は人に雇はれて、農業の手傳てづかなどして、やつとくらしを立てました。毎朝早く起きて、母の食物やつかひ水などをそれ／＼用意

尋修五

尋修五

して、仕事に出て行きました。仕事がすむと急いで歸つて來て母に安心させ、毎夜湯をつかはせ、又身體をなでさするなど、何事にもよく氣をつけていたはりました。儀兵衛は貧しい中にも、母だけには着物や食物に少しも不自由させないやりに心がけ、母のたべたいといふ物はすぐにとゝのへ、母のこゝろよくたべるのを見て喜びました。又母の氣づかひさうなことは、なるたけ聞かせないやりにし、母の喜ぶことは骨身を惜しまず何でもしました。

人に雇はれて京都や伏見ふしに行き、用事がひまどつて歸りがおそくなることもありました。そんな時には、母は



待ちかねて、歩行も不自由なのに、杖をついて半町ばかりも迎へに出て待つてゐます。やがて歸つて來た儀兵衛の顔を見ると、母は大そう喜んで涙を流し、儀兵衛も母の迎をありがたがつて涙をこぼし、二人ともものも言へないで立つてゐます。しばらくして儀兵衛は買つて來た土産を母に渡し、手を引いて家に歸つて行きます。近所の人はこのやりすを見て、誰でも感心しない者はありませんでした。

## 第十一課 兄弟

尋修五

伊藤小左衛門は伊勢の室山村の人で、味噌醬油の製造を業としてゐました。小左衛門に三人の弟があつて、兄弟互に心をあはせて家業に勵んだので、室山味噌の評判が世間にひろまりました。

或年、大地震があつて、その倉はたいていつぶれました。その上、雨が長く降續いた爲に、味噌醬油はおほかた腐つてしまつて、さしも繁昌してゐた伊藤の家もにはかに衰へました。世間の人は誰も、いくら室山の味噌屋でも、もとの身代になることはむづかしからう。と言つてゐました。小左衛門は三人の弟に、今から兄弟心をあはせて、少しも他人の力にたよらないで、一生けんめいに



家業に勵み、三年の後には、きつともとの身代にして見せようではないか」と相談しますと、弟たちも皆進んで賛成しました。それから兄弟は仕事を手わけして、大ぜいの人をつかひ、一人はつぶれた倉のとりかたづけにかゝり、一人は味噌・醬油の仕込を始め、一人は又遠くへ行つて材木を買集め、小左衛門は全體のさしづをしました。かやうにして四人の兄弟は日夜働いて家業に勵んだので、三年たゝないうちに前よりもりつばな倉が出来、身代ももとの通りになりました。

其の後、小左衛門は製茶・製絲等の業を始めましたが、兄弟はいつも力をあはせて助け合ひ、仕事に勵んだので、

尋修五

尋修五

家は益繁昌して來ました。

## 第十二課 進取の氣象

小左衛門が製茶・製絲の業を始めたのは、横濱の港が開けた頃で、外國では茶や生絲がたくさんいることに目をつけたからであります。

小左衛門は先づ茶の實を蒔いて、培養のしかたを研究し、製茶の法にも工夫を積んだので、數年の後には、たくさん茶が出来るやうになりました。又其の地方の人にも茶の木を植ゑることを勧めました。

小左衛門は又桑を植ゑて蠶をかひ、製絲の業を興しました。初は僅か二人の工女を雇ひ、手ぐりて絲をとらせ



てゐましたが、次第に人數を増して仕事を大きくしました。しかし、手ぐりではどうしてもよい品が出来ないので、機械で絲をとることを思ひ立ちました。そこで機械の使用に熟練した人を雇ひ入れようと思つて、あちこちとさがしたがなか／＼ありませんでした。其の上、製絲にけいけ



尋修五

んある人たちは、新しい機械で絲をとるのは、利益が少いから、始めない方がよい。と言つたが、小左衛門は、これまでのしかたでは、とても外國にむく品は出来ない。と言つて、新しい機械をすゑて、生絲を製することを始めました。しかし慣れないので、よい品が出来なくて損をしました。そこで小左衛門は上野の富岡に行つて、製絲法をしらべて歸り、また機械を改め、其の數を増して、熱心に仕事に勵んだが、やはりよい品が出来ず、また損をしました。小左衛門は進取の氣象に富んでゐるから、少しもそれに屈せず、新しい蒸氣機械をそなへ、又親類の者を富岡にやつて製絲法を習はせ、一生けんめいに改



良をはかりました。かやうに苦心に苦心を重ねた末、とうとう外國商人等もほめる程の、よい品が出来るやうになりました。又その爲にこの地方の製絲の業もだんだん盛になりました。

## 第十三課 勤勞

伊豫の筒井村の農家に作兵衛といふ人がありました。祖先からの借金がたくさんあつたので、その日くらのくらしもなか／＼難儀でした。作兵衛は幼い時から、何とかして家の借金を返したいと思つて、一生けんめいに働きました。

十五歳の時に、母は病氣でなくなりました。その後、作兵

尋修五

尋修五

衛は朝夕食事の世話をし、晝は父と一しよに田畑を耕しました。又夜おそくまで草鞋を作り、それを軒下につり下げて置いて、往來の人に賣りました。その草鞋の丈夫なのは、き工合のよいのが評判になつて、いつもすぐに賣切れました。作兵衛はかやうに夜晝一心に働いたので、村の人は皆、若い者の手本だといつて、ほめないうちはありませんでした。そのうちに家のくらしも次第に樂になり、長い間の借金も残らず返してしまひ、其の上に少しばかりの田地を買ふことが出来ました。其の時の親子の喜はたとへやうもありませんでした。作兵衛は勇んで村役人の所



へ行つて、買った田地を公おほやけに自分のものとする手續てづきを  
 しました。村役人たちは作兵衛の買った田地が悪くて  
 收穫しゆくわくが少いのに、税を納めさせることを氣の毒に思ひ  
 ました。しかし、作兵衛は、どんな田地でも骨折つて作つ  
 たならば、決してよくなることはありますまい。此  
 の村に荒れた田地の多いのは、私どもの骨折がまだ足  
 らない爲だと思ひます。私は出来るだけ働いて、悪い田  
 地をよい田地に仕上げ、村の爲になるやうにしたいと  
 思ひます。と言ひましたので、村役人たちは作兵衛の心  
 掛に感心しました。

其の後、作兵衛は、はたして其の田地をよい田地に仕上

尋修五

げました。なほ其の上に、よい田地をたくさん買ふこと  
 が出来ました。

第十四課 勉學

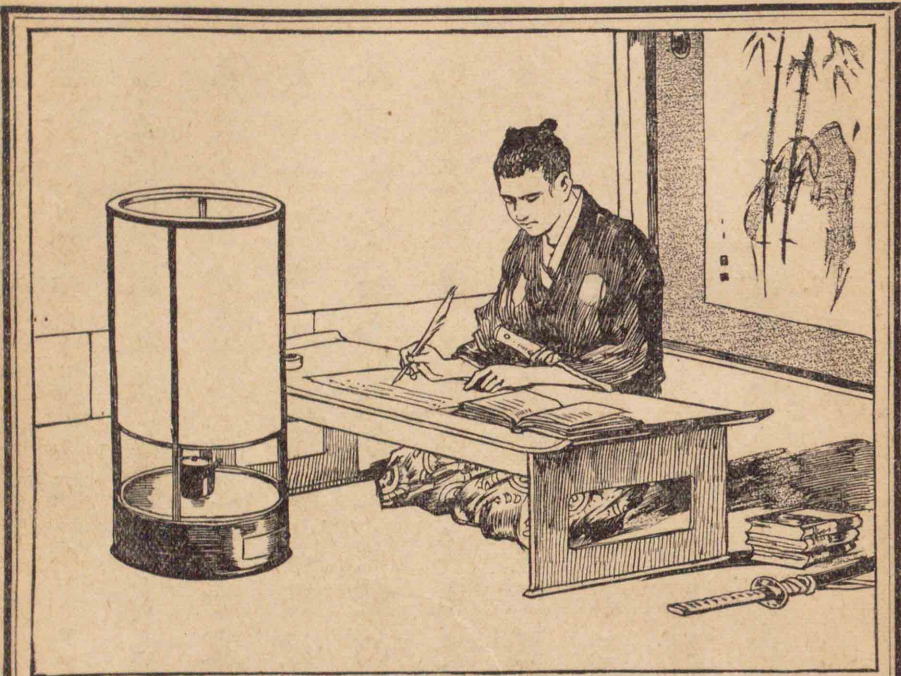
勝安芳かつやすよしは若い時、西洋の良い兵書を読みたいと思つて、  
 しきりにさがしてゐましたが、其の頃、舶來はくらいの書物は少  
 くて、なか／＼手に入りませんでした。或日、本屋でふと  
 オランダから新着の兵書を見つけました。見ればなか  
 なか良い本で、ほしくてたまりません。價をたづねると  
 五十兩とのことです。安芳は其の頃大そう貧乏びんぱふで、とて  
 もそんな大金は拂はらへません。家に歸つていろ／＼考へ  
 た末、あちこちと親類などに相談して、十日あまりもか



かつて、やつと其の金をこしらへました。すぐにさきの本屋にかけつけますと、本はもう賣れてしまつてゐたので、がっかりしました。しかし、どうしてもそのまゝ思ひ切ることが出来ません。そこで買った人の名を聞いて、やつと其の家をたづね出し、わけをくはしく話して、「ぜひあの本をおゆづり下さい」と頼んだが、持主はなかなか聞入れません。「それでは、しばらくお貸し下さい」と言ふと、「それも出来ません」とことわられました。安芳はしばらく考へて、「あなたが夜おやすみになつてから後でなりと、どうかお貸し下さいませんか」と折入つて頼むと、「それ程に御熱心ならば、見せて上げませう。しかし、

尋修五

尋修五



外へ持出されては困ります」と言ふので、安芳は次の夜から持主の宅で寫させてもらふことにしました。それから毎夜一里半もあるところを通つて、雨が降つても風が吹いても、約束の時刻におくれたことなく、半年もかゝつて、とうとう八冊の本を寫し終りました。其の時、意味の分ら



ないところを持主に問ひますと、持主は、「お恥づかしいことには、私はまだ讀終らないので、お答へが出来ません。それにあなたはこれを寫して、其の上そんなにくはしくおしらべになつたのは感心です。私のやうな者が此の本を持つてゐても、益のないことですから、あなたに差上げます。」と言ひました。安芳は、「私は寫させてもらつたので、たくさんです。二通りは入りません。」とことわつたが、無理にすゝめられるので、とうくもらひました。安芳はかやうに學問に勵んだので、後にはりつばな人になりました。

第十五課 勇氣

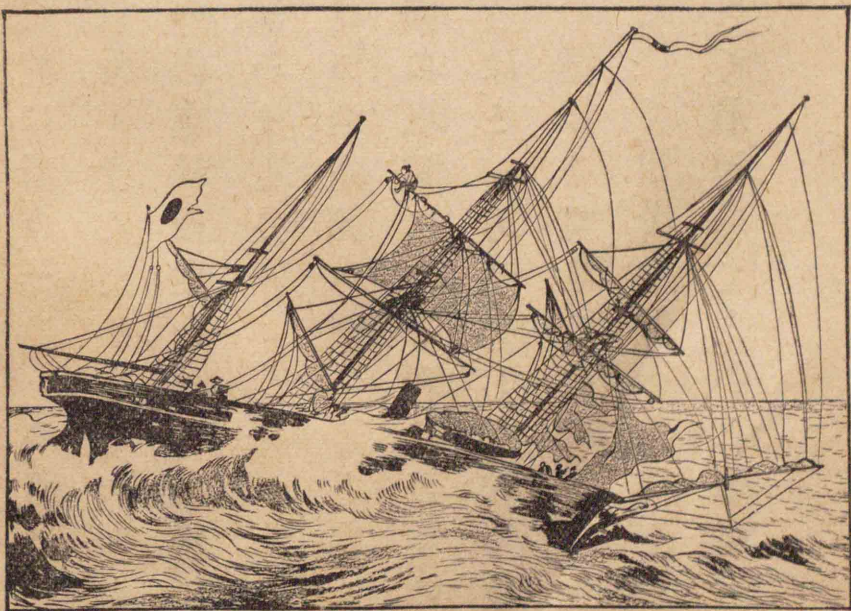
尋修五

尋修五

安芳は幕府の命を受けて長崎に行き、オランダ人について航海術を學びました。修業がすんでからもついで長崎に留つて、血氣盛りの海軍練習生を教へ、九州の近海で、あちこちと航海を試みました。間もなく、幕府は使をアメリカ合衆國へやることになりました。其の時、使は合衆國の軍艦にのせ、別に日本の軍艦を一そりやるといふうはさがありました。安芳はそれを聞いて、我が航海術の進歩を見せるには、この上もないよい機會だと思つたので、自分の教へた部下をさしづして日本人の力だけで航海をしたいと願ひ出しました。



何分我が軍艦を外國へやるのは始めてのことであり、まだ練習も十分に積まない日本人だけではあぶないと思つたので、幕府は容易に許しませんでした。しかし、安芳があくまで願つてやまないのので、幕府も遂に其の熱心と勇氣に感じて、咸臨丸といふ小さい軍艦で安芳等をやること



尋修五

尋修五

にきめました。

航海中は毎日のやうに雨風が續いて、海が大そう荒れました。嵐がはげしい時には、船體がひどくゆれて、ねぢ折られさうになつたことが幾度もありました。しかし、安芳等は少しも恐れず、元氣よく航海をつゞけ、日本を出てから三十八日目にサンフランシスコに着きました。アメリカ人は、日本人が航海術を學んでからまだ間もないのに、少しも外國人の助を受けずに、小さい軍艦で、よくも太平洋を無事に越えて來たものだと、大そう感心しました。

第十六課

忍耐



アメリカ發見で名高いコロンブスは、イタリアの海岸に生まれ、海が好きで、十四の年から船乗ふねのりになりました。其の頃はまだ地理の學問が開けず、又さまざまに迷信などがあつて、遠くに航海する者はありませんでした。コロンブスはいろいろの記録きろくや報告ほうこくを深く研究して、大地は水と陸とで出来てゐて、其の形は球のやうなものに違ひないから、ヨーロッパから西に向つて、どこまでも進んで行けば、きつとア ज्याの東に達することが出来ると言出しました。しかし、其の頃の人は大地は平たいものとばかり思つてゐたので、コロンブスの言ふことを誰一人として信じる者がなく、あざけり笑ふばかりでした。

尋修五

尋修五

かりでした。

コロンブスはそれに少しも屈しないで、熱心に研究を積んで、いよく自分の考へてゐることに間違がないと信じました。そこでどうかしてそれを實行しようとしたが、自分にはとても航海の費用を出す力がなく、さりとて事業を助けてくれる人もありません。いろいろ苦心したけれども、久しい間、其の志を遂とげることが出来ませんでした。後にイスパニヤの皇后イサベラに知られ、其の助を受けて、やつと年來の志を實行する時節が來ました。そこでコロンブスは喜び勇んで、三ぞうの船に百二十人の水夫をのせ、イスパニヤを出帆しゅっはんするこ



とになりました。

それから大西洋を西へくと進んで行つたが、日數がたつても、陸地の影さへ見えません。水夫等は、このさきどうなることかと、次第に恐しくなつて、このまゝ引返さうとコロンブスにせまつたが、コロンブスは落ちついて、いろくく水夫等をさとししました。かやりにして進んで行くうちに、陸地が見えたと喜んでゐると、それは雲であつたことが度々でありました。水夫等は失望して、もうとても辛抱しきれず、コロンブスがどうしても引返すことをきかないなら、海の中に投げこまうとたくらんだ者さへありました。けれども、コロンブスは忍

尋修五

尋修五



耐の心の強い人であつたから、さわいでゐる水夫等を慰めたり、おどしたりして、なほさきへくと進んで行きました。出帆後七十日たつて、遂に新しい島を発見しました。これが今のサンサルバドル島です。それからコロンブスは一たんイスパニヤへ歸つて、このことを皇后に報告し、其



の後、何べんも航海して、とうとうアメリカ大陸を發見  
することが出来ました。

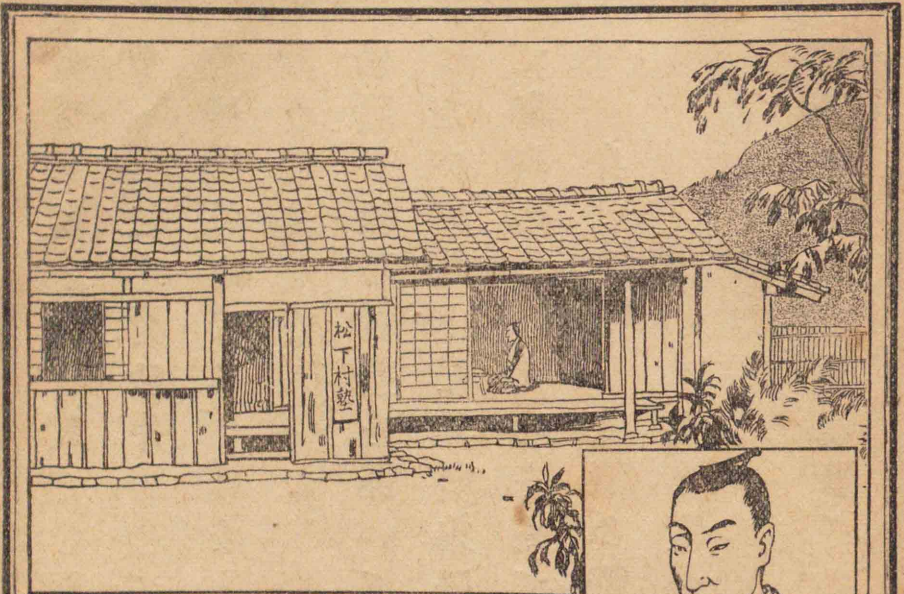
第十七課 自信

吉田松陰は長門の人であります。十一歳の時、始めて藩  
主に召出されて兵書の講釋をいひつけられました。家  
の人たちはいろいろと氣づかつたが、松陰は藩主の前  
に進み出て、大ぜいの家來の列んでゐる中で、少しも臆  
せず、自分の知つてゐる通りはつきりと講釋したので、  
藩主をはじめ皆大そう感心しました。

松陰は外國の事情がわかるにつれて、我が國を外國に  
劣らないやうにするには、全國の人に尊王愛國の精神

尋修五

尋修五



を強く吹込まな  
ければならない  
と、かたく信じて、  
一身をさゝげて  
此の事に盡さうと決心しま  
した。二十七歳の時、郷里の松  
本村に松下村塾を開いて、弟  
子たちに内外の事情を説き、  
一生けんめいに尊王愛國の  
精神を養ふことにつとめま  
した。松陰は至誠を以て人を



教へれば、どんな人でも動かされないと、深く信じて、松本村は片田舎ではあるが、此の塾からきつと御國の柱となるやうな人が出る。と言つて、弟子たちを勵ましました。

松陰が松下村塾を開いてゐたのは、僅かに二年半であつたが、はたして其の弟子の中からりつばな人物が出て、御國の爲に大功をたてました。

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも

留め置かまし 大和魂

第十八課 主婦の務

瀧子は吉田松陰の母であります。松陰の父杉百合之助

不合理的

は松陰が少年の頃までは、家祿ばかりでは、くらしを立てることが出来ませんでした。そこで、瀧子はよく夫を助けて、野に出て田畑を耕したり、山に行つて薪をとつたりして、仕事に骨折りました。又よく姑に事へ、子供の養育につとめ、裁縫洗濯のことから家事一切をひとりて引受けて、かひなく立働き、馬を飼ふ世話まで自分でしました。





瀧子は姑を大事にしました。三度の食事には暖いものをすゝめ、衣服は柔いものを着せなどしていたはり、裁縫する時は喜ばれるやうな話をして聞かせて慰めました。又姑の妹がこの家に世話になつてゐたが、或時重い病氣にかゝりました。瀧子は久しい間、夜もろくろく寝ずに心から介抱したので、姑は忙しくて暇のないのに、親類の世話まで親切にしてくれて、誠に有難いと言つて、涙を流して喜びました。

後、百合之助は藩の役人に取立てられて、城内にうつりましたが、瀧子は家に留つて、よく家政をととのへ、松陰等の養育につとめました。かやうに瀧子は夫を助けて

勤儉力行したので、家も次第に豊になり、又教育の仕方がよかつたため、子供は皆心掛のよい人になりました。中にも松陰は國の爲に盡したびく、難儀に出會つたが、いつも瀧子は我が子を勵まして、尊王愛國の道に盡させました。松陰が松下村塾を開いてゐた間も、瀧子はよく弟子たちをいたはり、又松陰をたづねて来る同志の人々を親切にもてなしました。

第十九課 朋友

新井白石は九歳の時から、日課を立てて、少しの暇でもむだにせず、一生けんめいに、學業に勵みました。後、木下順庵といふ名高い學者の弟子となつてからも、貧苦を



こらへて、益、勉強したので、日にく、學問が深くなりま  
した。

或時、順庵は白石を加賀侯に推薦しようと思つて、その  
ことを白石に告げました。其の頃、やはり順庵の弟子で、



岡島石梁といふ人があり  
ました。その事を聞いて、  
白石に、加賀は私の郷里で、  
家には年よつた母がたつ  
た一人で、私の歸るのを待  
つてゐる。もし先生の御推  
薦で、私が加賀侯に仕へる

尋修五

尋修五

ことが出来たら、母もどんなに喜ぶだらう。と言ひまし  
た。白石はそれを聞くとすぐに、順庵のところへ行き、其  
のわけを話して、私の仕へますのは、どこでもよろしう  
ございます。どうか私の代りに、岡島を加賀へ御推薦下  
さい。と願ひました。順庵は白石が友情に厚いのに感心  
して、その通りにしました。二年程たつて、白石は順庵の  
推薦で、甲斐侯に仕へることになりました。侯が後に將  
軍となつてから、重く用ひられました。

第二十課 禮儀

我等が世間の人と共々に生活するには、知つてゐる人  
にも知らない人にも禮儀を守ることが大切です。禮儀



を守らないと、人に不快の念を起させ、また自分の品位をおとすことになります。

人の前に出る時には、頭髪や手足を清潔にし、着物のきかたにも氣をつけて、身なりをととのへなければ失禮です。人と食事をする時には、音を立てたり、食器をらんざつにしたりしないで、行儀をよくして、愉快な心持でたべるやうにしなければなりません。又室の出はいりには、戸障子のあけたてを静かにするものです。

汽車・汽船・電車などに乗つた時には、互に氣をつけて、人に迷惑をかけないやうにすることが必要です。自分だけ席を廣くとつたり、不行儀ななりをしたり、いやしい

尋修五

尋修五

言葉づかひをしたりしてはなりません。集會場・停車場其の他、人がこみあつて順番を守らなければならぬ場所、人をおしのけて、われさきにと行つてはなりません。又人の顔かたちやなりふりを笑ひ、悪口を言ふのはよくないことです。

外國人に對して禮儀に氣をつけ、親切にするのは、文明國の人の美風です。

第二十一課 度量

西郷隆盛が江戸の鹿兒島藩の屋敷に住んで居た頃、或日友人や力士を集めて、庭で相撲をとつてゐると、取次の者が來て、福井藩士で橋本左内といふ人が見えて、ぜ



ひお目にかゝりたいと申されます。と言ひました。一室に案内させ、着物をきかへて會つて見ると、左内は二十歳あまりの、色の白い、女のやうなやさしい若者でした。隆盛は心の中で、これではさほどの人物ではあるまいと見くびつて、あまりにいぬいにあしらひませんでした。左内は輕蔑けいべつされてゐることをさとりましたが、少しも氣にかげず、あなたがこれまで國家の事にいろくお骨折りになつてゐると聞いて、したはしく思つてゐました。私もあなたの教を受けて、及ばずながら、國家の爲に盡したいと思ひます。と言ひました。隆盛はそしらぬ顔で、いや、それは大へんなお間違です。私のやうな馬

尋修五

尋修五

鹿者かが國家の爲をはかるなどとは、思ひもよらぬことです。たゞ相撲が好きで、ごらんを通り、若者どもと一しよに、毎日相撲をとつてゐるばかりです。と言つて、相手にしませんでした。それでも左内は落ちついて、あなたあなたの御精神はよく承知しやうちしてゐます。そんなにお隠しなさらずに、どうぞ





うちあけていたゞきたい」と言ひ、真心をこめて、自分の意見を述べました。隆盛はちつとそれを聞いてゐたが、左内の考が如何にもしつかりしてゐるので、すつかり感心してしまひました。

隆盛は左内が歸つてから、友人に向ひ、「橋本はまだ年は若い、意見は實にりつばなものだ。みかけがあまりやさしいので、はじめ取りあはなかつたのは、自分の大きさを過であつた」と言つて、深く恥ぢました。

隆盛は翌朝すぐに左内をたづねて行つて、「昨日はまことに失禮を致しました。どうかおとがめなく、これからはお心安く願ひたい」と言つてわびました。それから二

尋修五

尋修五

人は親しく交り、心をあはせて國家の爲に盡しました。左内が死んだ後まで、隆盛は「學問も人物も自分がとても及ばないと思つた者が二人ある。一人は先輩の藤田東湖で、一人は友人の橋本左内だ」と言つてほめました。

第二十二課 信義

加藤清正は信義の心の強い人でありました。豊臣秀吉が明國を討つために、兵を朝鮮に出した時、淺野幸長が蔚山の城を守つてゐたところへ、明國の大兵が攻めよせて來ました。其の時、城中の兵が少い上に、敵がはげしく攻めるので、城は日にましあやふくなりました。そこで、幸長は使を清正のところへやつて救を求めました。



清正はそれを聞いて、自分が本國をたつ時、幸長の父の長政がくれぐれも幸長の事を自分に頼み、自分もまた其の頼を引受けた。今もし幸長のあやふいを見て救はなかつたら、自分は長政に對して面目が立たない。と言つて、すぐに部下の者を引きつれて出發しました。清正は手向つて來る敵を僅かの兵で追散らして、蔚山の城にはいり、幸長と力を合はせ、明國の大兵を引受けてこゝにたてこもり、



尋修五

尋修五

大そう難儀をしたが、とうとう敵を打破りました。

格言 義ヲ見テ爲ザルハ勇ナキナリ。

第二十三課 誠實

清正は嘗て、石田三成等のざんげんで、秀吉の怒を受け、伏見の屋敷に謹慎してゐたことがありました。ところが、或夜大地震があつて、多くの家が倒れました。清正は秀吉の身の上を氣づかつて、部下の者を引きつれてまつ先に城にかけつけ、夜があけるまで、其の門を守つてゐました。秀吉はそのやうすを見て、清正の誠實に感心して、怒もおのづととけました。あくる日、清正を召出して、ざんげんのことを自分できゝたゞしたが、清正に



罪のないことが明らかになつたので、却つて前よりも厚く信用するやうになりました。

秀吉がなくなつた後、其の子の秀頼はまだ幼くて大阪城にゐました。其の頃、徳川家康の勢が大そう盛になり、豊臣氏の恩を受けた者も次第に家康について、秀頼をかへりみる者が少くなりました。しかし、清正は相變らず秀頼の爲に心を盡し、大阪を通るたびに、きつと秀頼の安否をたづねました。家康はそれをきらつて、そつと人にいひふくめて、やめさせようと思ひました。清正は、大阪を通りながら、秀頼公のごきげんを伺はないのは武士の道でない、又太閤の御恩を忘れてはすまない、と言

つて、聞きませんでした。

或時、秀頼が家康から京都まで面會に来るやうにと言つて、招かれたことがありました。秀頼の母は家康に敵意のあることを氣づかつて、秀頼の京都に行くことに同意しませんでした。けれども、清正は、この事で兩家の仲が悪くなつてはならないと考へて、私が命にかけてお護り申しますから、ぜひお出を願ひます、と言つてすめました。それで秀頼は清正と一しよに京都へ行くことになりました。清正は秀頼が家康と對面する間はもちろん、往復の途中でも少しも側を離れずに、秀頼の身を護つて、無事に大阪に歸りつきました。其の時、清正



は、今日はいさゝか太閤の御恩に報いることが出来た。と言つて、涙をこぼして喜びました。

第二十四課 謝恩

豊臣秀吉の夫人は織田信長の足輕の娘であります。信長の家來に伊藤右近といふ人があつて、夫人の生まれした時から引取つて親切に養育し、大きくなると世話をして奉公に出しました。其の頃、秀吉は木下藤吉郎といつて、まだ低い身分であつたが、夫人を妻にもらはうと思つて、其のことを申し入れました。夫人はまづ右近の所へ行つて相談すると、右近は、藤吉郎はちゑのすぐれた人だから、末の爲によろしからう。と言つて、いろく

尋修五

尋修五



支度をととのへて、藤吉郎と結婚させました。

其の後、藤吉郎は次第に立身して、とろく太閤秀吉といつて、日本國中の人から尊ばれる身となつたが、昔世話になつた右近のことを忘れず、方々をさがさせて、やつとたづね出し、其の妻と一しよに大阪城につれて來させました。秀吉夫婦は大そらねんど



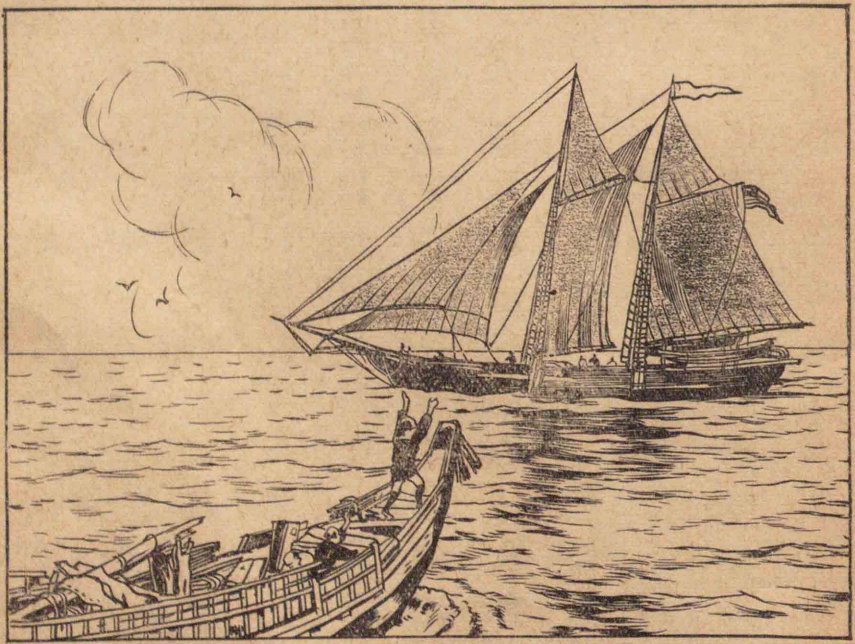
ろに右近等をいたはり、昔のことなどを言出し、涙を流して世話になつた禮を言ひ、夫人自らたくさんの物を持出して與へました。此の時、夫人は右近等の側により、「お身等の綿入は汚れてゐるから、私が洗濯してあげませう。」と言つて、別に着物を出して着かへさせました。それから十日程たつて、右近夫婦を招いて、さきの洗濯が出来ました。と言つて渡しました。秀吉は右近に祿を與へて、大阪に住まはせることにしました。

第二十五課 博愛

紀伊の水夫虎吉等は、蜜柑を船に積んで江戸に行き、其の歸途で、暴風にあひました。船は山のやうな大波にゆ

られて、遠くの方へ吹流され、二箇月ばかりも大洋の中をたゞよひました。其の間に、食物も飲料水もなくなつて、大そう難儀をしました。

或日、ちやうど通りあはせたアメリカ合衆國の捕鯨船が、虎吉等を見つけて、救ひ上げ、パンなどを與へて、親切にいたはりました。船





長がどこの者かときいたが、言葉が通じないので、地圖を出して見せて、やつと紀伊の人といふことがわかりました。それから、この船は北の方へ鯨を捕りに行き、半年ばかりたつて、歸りに、船長は便船に頼んで虎吉等を香港まで送り届けました。そこには仕立屋をしてゐる日本人があつて親切に世話をし、フランスの船に頼んで上海まで送つてくれました。それから虎吉等は支那の役人の保護を受け、便船に乗つて、やつと我が國に歸ることが出来ました。郷里では三年もたよりがないから、死んだことと思つてゐたところへ、無事に歸つて來たので、夢かとはばかり喜びました。

尋修五

尋修五

知つてゐる人も知らない人も博く愛するのが人間の道であります。いろく災難にあつて困つてゐる者を救ふのはもちろん、たとひ敵でも、負傷したり、病氣になつたりして苦しんでゐる者を助けるのは、博愛の道です。明治三十七八年戰役に上村艦隊が敵の軍艦リユーリクを打沈めた時、敵のおぼれ死なうとする者を六百餘人も救ひ上げたのは、名高い美談であります。

## 第二十六課 德行

中江藤樹は近江の小川村の人であります。幼い時から祖父の家に養はれ、其の後をついで、伊豫の大洲侯に仕へてゐましたが、故郷の母を養ふために、役をやめて小



川村へ歸りました。

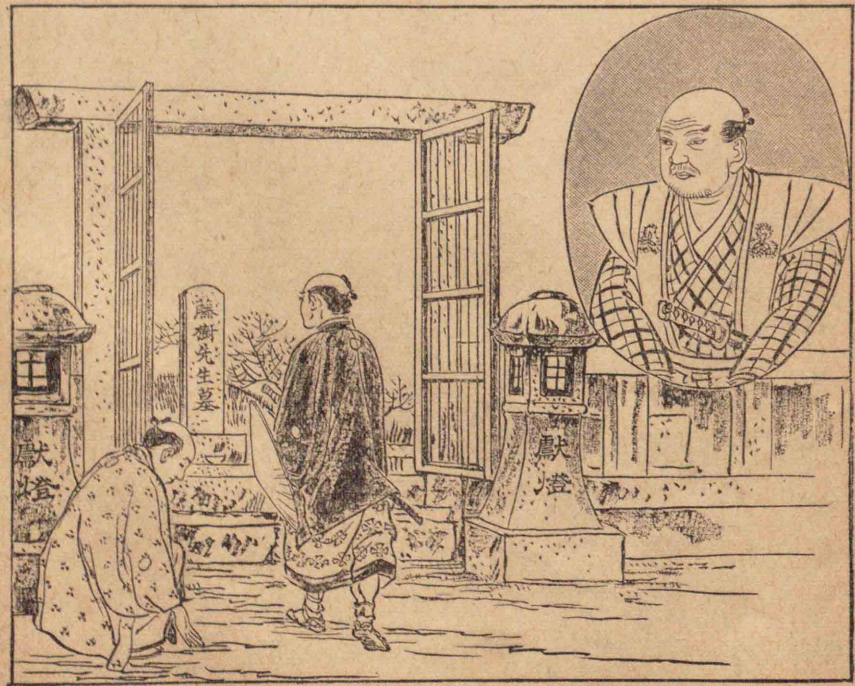
藤樹は貧しい中で、年よつた母に事へて孝行を盡し、又熱心に學問に勵んだので、とう／＼徳の高い學者となりました。そこで、藤樹をしたつて、遠い所からはる／＼教を受けに来る者も多く、馬子のやうな、學問をしない者までも、其の徳に感化かんくわされました。それで世間の人が皆、藤樹を敬うやまつつて、近江聖人おうみせいじんといひました。藤樹がなくなつてから、長い年月がたつてゐるが、村の人たちは今でも其の徳をしたつて、年々の祭をしてゐます。

或年、一人の武士が小川村の近くを通るついでに、藤樹の墓はかをたづねようと思つて、畑を耕してゐる農夫に道

尋修五

尋修五

をきゝました。農夫は自分が案内しようといつて、先に立つて行つたが、途中で自分の家に立ちよつて、着物をきかへ、羽織まで着て來ました。武士は心の中で、自分を敬つて、かやうにしたのだらうと思つてゐました。藤樹の墓はかについた時、農夫は垣かきの戸をあけて、武





士を其の中にはいらせ、自分は戸の外にうやくしくひざまづいて拜みました。武士はそこではじめて、さきに農夫が着物をきかへたのは、全く藤樹を敬ふためであつたと氣がついて、深く感心して、ていねいに墓を拜みました。

第二十七課 よい日本人

我が大日本帝國は萬世一系の天皇を戴き、御代々の天皇は我等臣民を子のやうにおいつくしみになり、我等臣民は數千年來、心をあはせて克く忠孝の道に盡しました。これが我が國の世界に類のないところであります。我等は常に天皇陛下、皇后陛下、皇太后陛下の御高德

尋修五

尋修五

を仰ぎ奉り、祖先の志を繼いで、忠君愛國の道に勵まなければなりません。忠君愛國の道は君國の大事に臨んでは、舉國一致して奉公の誠を盡し、平時にあつては、常に大御心を奉じて各自分の業務に勵んで、國家の進歩發達をはかることであります。我等が市町村の公民としてよく其の務を盡すのは、やはり忠君愛國の道を實行するのであります。

父母には孝行を盡して其の心を安んじ、兄弟は仲よくして互に助け合ひ、主婦はよく家を治め子供を教養しなければなりません。

人に交つては信義を重んじ、度量を大きくし、殊に朋友



には交を厚くし、人から受けた恩を忘れず、世に立つては産業を興し、公益を廣め、禮儀を重んじ、衛生の心得を守り、又博く人を愛し、誰にも親切にしなければなりません。

常に誠實を旨とし、進取の氣象を養ひ、自己に信賴し、勇氣を勵まし、よく忍耐し、勤勞を重んじ、儉約を守らなければなりません。又身體の健康を進め、學問に勉め、徳行を修めるやうに心掛けることが大切です。

是等の心得を守るのは、教育に關する勅語の御趣意にかなふわけでありませう。我等はこの御趣意を深く心にとめ、至誠をもつて是等の心得を實行し、あつぱれよい

日本人とならなければなりません。

尋常小學修身書卷五 兒童用終



昭和五年十一月四日翻刻印刷  
昭和五年十二月十三日翻刻發行

尋常小學修身書卷五 兒童用

定價金八錢

注

著作權所有

著作兼  
發行者

文  
部  
省

昭和五年十一月六日  
文部省檢査濟

發行所

翻刻發行  
兼印刷者

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地  
東京書籍株式會社  
代表者 石川正作

印刷所

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地  
東京書籍株式會社工場

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地  
東京書籍株式會社

5.72



尋

五

土井秋

広島大学図書

2500027861



375.93

M